

地域の皆様に高機能な医療を提供し、
温もりのある病院で
あり続けたい

がんの早期発見に役立つ「PET-CT」、定位放射線治療「ノバリス」など先進医療で知られる浅ノ川総合病院に、医療法人社団浅ノ川理事長の小市勝之氏を訪ねました。その穏やかな語り口からは、地域に向けられた責務の念と温かなまなざしが感じられました。

医療法人社団浅ノ川 理事長

こいち かつゆき

小市 勝之氏

金沢医科大学医学部卒業

1990年 石川県済生会金沢病院

1995年 公立学校共済組合北陸中央病院

2003年 医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院

2008年 現職

重要5疾病に対応する 体制づくり

浅ノ川総合病院は昭和26年に創立、地域に密着した高機能な医療施設をめざして歩んできました。医療法人社団浅ノ川グループとしては、当院のほか4つの病院と1つの老人保健施設を運営しています。民間病院では北陸最大級の規模でしょう。

当院では先代より、国の医療計画である5疾病（がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病、精神疾患）5事業に則った体制を整備してきました。長寿化社会を迎えて罹患数の増大が予測されるがんや成人病（現在の呼称は生活習慣病）にいち早く重点を置き、がんの放射線治療である「ノバリス」、「ガンマナイフ」などの先進的な機器を導入し、技術の研鑽に取り組みできました。心臓病、脳卒中に特化した病院として、金沢循環器病院と金沢脳神経外科病院という関連病院を設けています。

地域連携による 医療サービスの充実

私自身は、内科医として富山の病院

に勤務してきました。前理事長が病の床に伏したことで私は当院によばれて主治医を務め、思いもよらず（？）跡を引き継ぐことになりました。各病院で大学の先輩たち、院長先生たちが奮闘してくださっているおかげで今日に至っています。私のできることとしては、病院同士がどここおりなく協力し合えるような雰囲気づくりを心がけてきました。

そもそも、医者というのは経営や経済には疎いものです。当初は、昨今のような医療の激動期に理事長という舵取りを任されるとは…という思いでした。度重なる医療法の改正や厳しさを増す診療報酬。少子高齢化を背景とする介護士など医療従事者の不足。在宅療養や介護の様々な課題…。そうした医療情勢にあつて、地域の人たちから頼りにされ、選ばれる病院であるには、「病気を診ますよ」と看板を掲げてただ安穩としているわけにはいきません。グループ内の病院、かかりつけ医、最新技術を持つ大学病院、介護福祉施設など地域の関連機関との連携を強めることで、複数の疾病を抱える患者さん、病院から地域へ戻る患者さんな

ど様々なケースに対してより適切な医療サービスを提供することが重要ではないかと思っています。

医療サービスに付加して さらなる地域貢献を

社会的には、「浅ノ川総合病院は地域医療を支えている」といった評価をいただいているのではと感じています。しかしながら、そこに甘んじることなく、病気でつらい思いをされている患者さんやご家族が幸せになれる、希望を持てるような「温もりのある病院」であることが私たちの志です。

さらに、私たちがいただいている報酬の大半は税金によるものですから、私たちはそれに見合う医療サービスはもちろん、付加価値的なものも社会へお返しすべきでしょう。地域の人たちが病院に期待すること、すなわち最新の高度医療や技術のスキルアップなどにプラスして、地域社会の発展に貢献できることを実践していきたいと考えています。

それを具体化する一策として、新たな病院の構想があります。当院もかなりの築年数が経ち、建て替えか、移転

新築を検討する時期がきています。新病院には、現在の病院を発展させたかたちとして、総合病院を核とした多角的な機能を有する医療センターのような存在を模索しています。地域の施設や企業などとも手を携え、看護学校などの教育機関、介護福祉施設、乳幼児の保育施設、障碍のある方のケア施設などを病院の周りに集積する。院長先生方やスタッフたちと話し合いを重ねていくつもりです。



理事長の任に当たりながら、週に2回、消化器内科医として外来診療も行っている